



「將牙岩山」への径

川内山塊 悪場峠～木六山～坪ノ毛

佐貴

【日時】 2014年4月12日（土）～13日（日）

【メンバー】 L佐貴、棚橋、松本、他1名

坪ノ毛の話は、昨年12月に正月山行の偵察のために下田の白根山に行った時、下山後のいい湯らでいて出ていたような気がする。元々は奈羅無登山を目指した山行で雨のために停滞していた日、地形図をしげしげと眺めていて、「まだ、【高石】の地形図に名前がありながら登っていない山があった」と気付いたのが発端であった。ここはどうしても落とさねばなるまい…と大真面目に演説したところ、そんな馬鹿馬鹿しい代わりに松本さんが乗ってきた。地元新潟の岳人である大平さんも前々から休みを調整してくれた。これは今年行かなければ後はない！

敬愛する笠原籐七氏の著作「川内山とその周辺」には、坪ノ毛についてこのような記述がある。

修正前の御神楽岳図幅に、將牙岩山という山があった。木六山から東北に延びている尾根続きで、大早出川と中杉川の間にある六五四米の山がそれで、地元では「ツボノケ」と呼び、將牙岩山などだれもどこの山か知っている者はいない。ではどうしてそんな山名が生まれたのか。私は次のような想像をして見た。このツボノケに「コガイワ」という所がある。（中略）コガイワは金剛岩のつまったもので、その一例としては仙見谷に「コガ清水」というものがある。（後略）

そして氏の推測は続く。陸地測量部の測量官がツボノケを指して地元の人夫に地名を尋ねる→ピンポイント的に「コガイワ」との返答を得る→測量官は「小ヶ岩」と記録→人手を経るにつれ読みがあやふやとなり、誤って「ショウガイワ」と読まれる→地図上に「將牙岩山」と記載されるに至る。

明治44年の測量から時を経て現在の地形図には勿論「將牙岩山」の文字はない。しかしこの一文がどうにも気になり、国土地理院から古地図を取り寄せたところ、やはり大正3年5月発行の地形図「高石」には坪ノ毛の場所に將牙岩山の名称が記されていた。なおこの当時の測量は早出川流域の右岸（東側）をカバーするには至っていなかったらしく、図幅の半分は空白となっている。

4/12（土）快晴

いつもの駐車場で大平さんと落ち合い、悪場峠へと向かう。記念碑のある駐車場の少し手前で雪が出てきて車はここまで、既に到着して出発準備中だった亀田山岳会パーティーにお会いし、朝から早くも血圧急上昇。佛峠までは最初だけ雪があったが、水無平

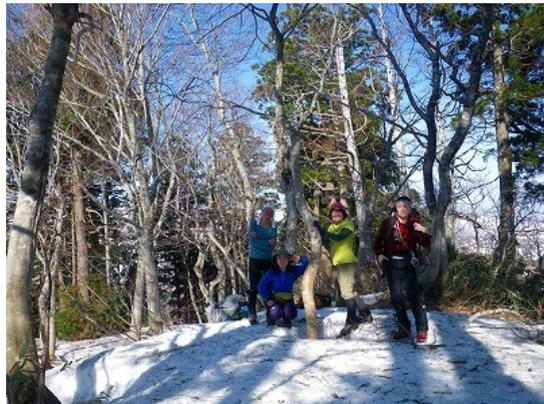


へ下るトラバース交じりの道は全部出ていた。ここ数年でこんなに雪が無いのは初めてだ。先行するもう一つのパーティーに稜線手前で追いつき、そこからは半分くらい出ている夏道も使いながら木六山へとひととに登りだ。先に木六山山頂に到着し休憩していた亀田山岳会の酒井氏に、360度見渡せる川内の山並みを眺めながらかつてトレースした沢の数々についてのお話を伺う。数十年遅れて川内山塊に魅せられた者としてはまさに偶像のような存在で、この場所でこのようなひとときが過ごせるという天の配剤に感謝するのみ。傍から見たら憧れのアイドルにサインを貰おうと群がるファンのようなようだったであろう。

計画書では坪ノ毛までの稜線を半分ほど進み、途中で幕としていたが、木六山から眺めるそれは案の定真っ黒であった。ここまでの道中も予想はしていたが、これでは突っ込んでも幕場もなければ水を作る雪もなさそうだ。木六山から少し下ったところで泊まり、坪ノ毛には明日、日帰り装備で往復しようという意見が早々にまとまっており、それに従って木六山の東の尾根上、5分ほど進んだ所に幕場を求めた。偵察を兼ねて一人、先に進んでみると、尾根上には何やらナタ目やら踏み跡のようなものがあるではないか。少しだけ浮き立つ思いで幕場に戻り、そこからは持ち寄ったビールやつまみで親睦を深めるべく宴会が始まった。

4/13 (日) 快晴

意気込んで4時半に出発しようとしたが、さすがにまだ暗かった。5時前に薄明るくなるのと同時に歩き出す。5分もすると雪がなくなり、よくあるモヒカン尾根（狭い稜線上に針葉樹が立ち並ぶ）の様相を呈してきた。だが、しかし！！最初の15分くらいは急だし踏み跡もそれほどはっきりしないし、とお先真っ暗な雰囲気だったのが、傾斜が少し緩むとあたかも道のような薄い藪に変化したのである。「これは、【径】だね！！」と急に気持ちが高揚し、坪ノ毛までは3時間もあれば到達するんじゃないか？と皮算用を始める始末。標高650mあたりまで下ると「径」はかなり歩き易くなり、いぶかしく思いながら歩を進めていると、c609を



坪ノ毛山頂には雪があった

過ぎて十三沢の右岸尾根が派生する小ピークとの間の鞍部に比較的新しい標柱があった。大きさは三角点と同じくらい、ただし材質は異なる。ここまでのナタ目と踏み跡は、この標柱を立てた時のものだったのだろうか。しかし初めて見る設置物で、名称も目的も分からない。帰京後に色々調べたがいまだに不明なままである。



謎の標柱からは一瞬シャクナゲと笹藪が濃くなり、もはやここまでかと思われた。しかし少し我慢するとその先でまたナタ目が復活、結局坪ノ毛の手前で雪が出てくるまで多少不明瞭ながらも「径」らしさは続いたのだった。10分ほど残雪の上を歩き、ダラッとしていてどこが山頂か少し迷うような坪ノ毛に7時45分到着。割岩山、奈羅無登山に続く川内山塊の三大マイナーピーク(?)、ついに完登である。

坪ノ毛の標高は652m、それに対して幕場はおよそ780m。途中のアップダウンも考えると行きよりも時間がかかりそうなので、名残惜しいが早々に山頂を後にする。すっかり日も高くなり、暑さの中での登り返しを思っただけで戦々恐々。しかし思ったよりも日陰が多く、ヨレる前にテントに戻ることができた。荷物をまとめていると木六山から手を振る一団がいる。こんなところにテントを張っている私達を何だと思っただろう。行きの足跡をたどりながら水無平そして佛峠を経て悪場峠へ。林道沿いのふきのとうを少し摘みながら車に戻った。

【行程】

4/12 除雪終了地点(7:10)～悪場峠(7:35)～佛峠(8:00)～水無平(8:17)～木六山(10:05/11:15)～C1(11:20)

4/13 C1(4:50)～坪ノ毛(7:45/8:10)～C1(10:30/10:50)～木六山(11:02)悪場峠(12:39)～駐車地点(13:10)

【地形図】高石

